

---

# 世界は俺を中心に回っている！！

走る地軸

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

世界は俺を中心に回っている！！

### 【Nコード】

N7057D

### 【作者名】

走る地軸

### 【あらすじ】

エルフや人間、獣人等数多くの生き物が住むこの世界で、一人のハーフエルフが魔王になり、暴れまわる、シリアス有り、ギャグ有り、笑い有り、涙あるといいな的主人公最強御都合主義の物語です。

## いきなり決戦！！魔王城！！（前書き）

### 読者様へのご注意

プロローグはシリアスどまつしぐらです。

こちらの世界観はクロフユの世界とほぼ同じの平行ワールドだ  
と思ってください。

こちらの文章は作者がモチベーションアップの為に書く、自己満足  
度120%なので読み手を選ぶかもしれませんが、ご了承ください。

いきなり決戦！！魔王城！！

彼は、魔王になりたかった。

しかし、魔族ではなかった。

けれど、人間でも、エルフでもなかった。

そう、彼は、ハーフエルフだった。

ライトグリーンの長い髪、腰にぶら下がる剣。

名を、アクシズ「アース」と言った。

「その椅子に座りたい。」

彼は、魔王の目の前にいた。单身一人で、ここに来たのだ。

仲間も無く、友も無く、希望も無く。

野望のみを抱えて。

魔王がアクシズに、「何が望みで、この魔王を倒そうとする？」と、問ったその言葉にそう返したのだ。

「ほう、面白い。我が椅子を狙いここに来る者がいたとはな・・・。

それも人間でも無く魔族でも無く、混ざり子がか。」

「ただ、椅子に座りたいだけではない、その杖を握り、魔王の名を冠する！！」

「混ざり子よ、何故、魔王を望む。」

「世界には理不尽が多すぎる、それを全て握り潰す為。指の隙間から流れ落ちる砂を二度と溢さない為！！」

「なるほど、運命に逆らうか……。」

魔王の……黒い肌の老人、膝まで伸びた長い髭が生きてきた年月を物語る、その全身から今すぐ逃げ出したくなる程の、魔力が放たれる。

「魔王よ、俺が強くなる為の踏み台となれ！！」

魔力の総量、術の数、威力、剣術、どれをとってもアクシズが魔王に、適う事はないだろう。

アレはそういう物だから魔王という。

だから、奇跡を起こせる勇者にしか倒せない。

自慢じゃないが、彼は勇者ではない。少なくともアクシズ自身がそう自覚している。

なんせ、口癖が、『俺は魔王だ！！』だからだ。

アクシズは、懷の中から取り出した、一本のナイフを魔王の顔めがけ投げつける！！

「魔力を使う必要もない」

魔王は格の違いを見せ付けるがごとく、首を傾げるだけで、ナイフをかわす！！

「チツ！！」

舌打ちするも、アレで傷つけられる訳が無いのは、分かっていた。そうしながらも横軸に移動しながら次は、ナイフを連続で3本投げる！！

「数が増えても同じ事……。」

先程と同じように魔力の結界を張る事もなく、首だけ傾けてナイフを避ける完全に舐めきっているのだろうか？

それもそのはずだ、彼の体は、ここに来るまでに四天王と呼ばれる魔族四人と、その他大量の魔物群れを殺してここまで来たのだ。

五体満足でここまで辿り着き、動いているのが奇跡と言っほどの夥しい程の傷、一番酷いのは腹部からの出血、放って置けばこのまま死に絶える事まちがいなしだ。

しかし、魔王が首を傾げる瞬間、彼はハーフエルフ特有の半端に尖った耳に両手を当て、呪文を刻んでいた。

「我にその声届く事なかれ」

魔王が、その姿を確認した瞬間である！！

キイイイイイイイイイインン！！

と言う高い音と夥しいまでの光、否、閃光が溢れた。

投げたナイフが爆発したのである。

そう、我々の世界で言う所のフラッシュグレネードである。

いかに、肉体が人を凌駕しようとして、瞳と耳を持つ物には耐えられない法則がある。

闇の魔物全般は光を嫌う、それは魔王も少なからず同じ事、目に飛び込む輝きに目を眩ませないわけがない。

いくら肉体が、三半規管が優れていようとも。

耳元で揺れ響きわたる振動に揺さぶられないわけがない、その感度が鋭ければ鋭い程に。

常人なら再起不能、魔王でも5秒くらいの無思考状態を作れるだろう。

「うおおおおおおおおおおおっ！！」

雄叫びを上げながら、魔王の心臓めがけ腰にさがっていた剣を振りぬき突き刺すのにはソレで充分！！

1秒あれば、やり方と距離によっては生き物は殺せるのである。

「ゴハッ」

しかし……血を吐いたのは、アクシズだった。

剣は魔王の胸に突き刺さっていた……心臓の数センチ手前に。

「この魔王を傷つけるとは、我も油断しすぎていた。お前の体に傷が無く万全なら我が命奪えていただろうな」

魔王はそう言うが、万全な体なら、魔王は油断しなかった、即ち傷さえつけなかっただろう矛盾。

魔王の杖から出た魔力の刃が、アクシズの胸に刺さっていた、あの光のせい、心臓ではなく、肺を貫かれていたのでは即死ではないが、元々ズタボロの上にさらに致命傷。

彼には奇跡を起こせないから、必然を起こす裏技が必要だった。

「クツクツクツ」

そして、切り札は相手が勝利を確信した時にこそ、使うのが確実だった。

笑ったのは……

「何を笑つ……!!」

アクシズだった。

「それは、エリクサー神の秘薬!!」



アクシズが予め、口に咥えていた瓶が、中身を肉体に流し込み役目を終えた空瓶がカランと音を立てて落ちた瞬間一瞬にして、身体に力もどる。

エリクサーとは、死者さえ蘇らせる、まさに神の秘薬！！その薬があっても、スタボロの姿で命からがら魔王の目の前に姿を現せたのは、正に今、この時までの布石！！

肉を切らして

「死ねえ！！！」

心臓を絶った。

ドス黒い魔王の返り血を浴びながら、剣に魔力を込める！！

「ぐうあああああああああ！！！」

「死ね！！第二形態も第三形態も死んでしまえば意味がない！貴様が生んだ後の第二の魔王は俺がやってやる！！だから・・・・・・・・・・死ねええええええええええ！！！！！」

剣から炎が舞い上がり、心臓を焼く、何を隠そう彼は魔法剣士だったのだ。

「混ざり子が、人と妖精の子が、神の肉体が魔に染まるか・・・・。」

剣が冷気を纏い、心臓を凍らす

「魔に染まろうが、朱に染まろうが、俺は俺だ!!」

剣から放たれる稲妻が凍った心臓を砕く!!!

「面白い、お前がこの先、魔王として何をなすのか・・・、みさせてもらおうか!!」

胸に刺さっていた、魔力の刃が消え、杖が力なく、魔王の血だまりに落ちる。

「ああ、好きにしろ、そしてお前の力を頂いておく!!」

剣から緑の光が溢れる。

「ああ、我が魔王の力受け取るがいい!!」

「全てを奪い取り、我が血、我が肉としろ!!ドレイン吸収魔法!!」

「ウオオオツオオオオオ!!!!!!」

魔王の断末魔が響く中、魔王から奪いし魔力により、一気に、先程まで魔力の刃が刺さりっぱなしで、エリクサーで回復した瞬間に再び傷ついていた、胸の穴がふさがる!!

そして、直ぐに・・・。

「ゲウウウウウウウ」

うなり声を上げるアクシズ、襲い掛かる魔力の流れにより強化されていく魔力回路。それは、あまりにも強大で、アクシズの肉体に苦

痛が襲い掛かるのだ。

「ガガガガガガガ！！」

アクシズの体に紫電が纏う、そして黒い瘴気があがる、闇の魔力に魔族ではないハーフェルフの肉体は耐えられないのだ！！

数時間後・・・。

魔王の間には、干からびた元魔王と新魔王が・・・倒れていた。

いきなり決戦！！魔王城！！（後書き）

うん、作者は満足です。

まー戦闘シーンの練習の殴り書きっばいですが、書きたいことを書きまくりました。ある意味勢いだけです。

まあ、あれです、感想とかあると嬉しいです。

悲劇!!それを二度と味あわぬために!!(前書き)

悲劇！！それを二度と味あわぬために！！

「はあっ、はあっ」

少年は、一人走っていた。

闇に目立つ、ライトグリーンの髪と、瞳、その両方を輝かせて。

そう・・・・・・燃え上がる炎に輝かせて

少年は、ハーフエルフだった。

エルフの母、人間の父の間に生まれた、紛い無い愛の結晶だった。

この土地では、亜人狩りが盛んで、エルフと人間は対立して生きていた。

そんな中でもやはり男と女、種族を超えた愛を持つ者もいたのである。

しかし、他のエルフと他の人間はそうはいかなかった。

それ故、父は町に住み、母は森に住んだ。

間に生まれた子は、何処に住めば良かったのだろうか・・・。

結局、子は母と共に森に住んだ。

忌まわしき人間の血を持つ、子は阻害され、他の者から虐待を受け、苛めも受けた。

「私の父は、人間に殺された、貴方に流れる半分の血と同じ血を持つ人間に」

石を投げられた……。

「俺の妻は、人間に犯され、殺された、お前に流れる半分の血と同じ血を持つ人間に」

棍棒で、殴られた……。

「ワシの、息子も、嫁も、孫も、皆、人間に、殺された貴様に流れる、半分の血と同じ血を持つ人間に」

ナイフで、背中を切り裂かれた……。

「どうしてなんだろう、僕の半分はエルフなのに……。」

少年は母の胸で泣くしかなかった……。

そんな少年が、10歳になった頃の事である。

人間に、隠れ里の場所が漏れた・・・。

エルフ達は、真っ先に少年の父を疑った。

エルフ達が、母子の家を囲む、松明を持って・・・・・・・・。

エルフ達は、里を捨てる、森を焼き払って・・・・・・・・。

エルフ達は、炎灯す、何も知らない母子が眠る家に・・・。

「死ぬ、忌まわしき者よ、貴様達のせいで、我らは里を失う」

聞こえる。

「焼け死ぬ、出来る事なら、出来るだけ苦しんで」

エルフ達の、罵声が聞こえる。



母が、異変に気づき子連れ逃げる。

エルフ達が、松明を投げる、石を投げる。

子連れ、母は、全てを掻い潜る。

エルフ達が、道を塞ぐ、剣を構えて首を狩ろうと。

「逃がすか、裏切り者！！」

母が、呪をつむぎ、道をこじ開けようと。

「母なる大地よ、今この時わが子を守る、力を」

爆する大地が、道を塞ぐエルフを吹き飛ばす、母は子の手を引き、走る、二人は走る。

森を抜ければ、人がいた。人間が、エルフを狩る人間が！！

「獲物だ、獲物がいたぜ？」

「しかも、上物だな、たまんねえぜ・・・」

逃げた、更に逃げた、隠れた、森のハズレの洞窟に・・・。

でも、時間の問題、追っては直ぐ傍で、くまなく探し回っている。

「母さん……どうしてなの、どうして、皆僕たちを苛めるの？  
僕の血の半分が、人間のだから？」

流す涙は、枯れたのだろうか？ 悲しい顔で、少年は尋ねた。

「ごめんね、母さんがいけないのよ……、里の掟を破って、あの人を愛したから、ごめんね、ごめんね」

母は、泣きながら、子を抱きしめ答えた。

「母さんは、悪くない！！悪いのは、皆だ！！」

少年は叫んだ、叫ばずにはいられなかった、世界で唯一、自分を愛してくれる存在が、泣いているのだから。

「ダメ、静かにして、そして、母さんの言う事を聞いて、此処の洞窟を抜けて西に行けば、港町があるわ、その港町では、国交が激しいから、亜人狩りは、禁止されているの、遠いけど、行けるわよね？ 貴方は強い子だから……」

「母さんは、一緒に来てくれないの？」

「ごめんね、母さんは、もう貴方とは居られないわ」

今生の別れ、それを理解するには、少年は幼すぎた。

「僕の、半分が人間だから？」

枯れたと思った、涙が少年の頬に伝う…………。

母は子を、泣きながら、強く……強く抱きしめ言う。否、わめいた……。

「違うの……違うのよ……私は、何があっても、貴方を愛してる……だから、逃げて……貴方は生きて……」

「おい、こっちに足跡があるぞ……」

追っ手の声がする、別れ時が、迫り来る。

「ほら、早く逃げて……」

少年は、走った……洞窟の奥へと向かって…………、泣きながら、泣きながら、今度こそ、本当に枯れて

仕舞うほど、泣きながら・・・。

「母なる、大地よ、アース家の名を持つて、今愛する者を守る為に、最後の力を・・・・・・生きてアクシズ・・・・私の愛しい子供・・・・。」

「母さん・・・・母さん・・・・母さん、グスツ・・・・かあ  
っ・・・・さん・・・・かあーーーーさーーーーん!!!!!!」

泣き喚きながら、走る少年の声が、洞窟に悲しく響いた。

どれくらい走ったのだろうか・・・・少年・・・・アクシズは、洞窟を抜けても、何キロも、走り続けていた、涙も枯れ・・・・喉も枯れ、泣き叫ぶ声もでない・・・・。

ついに、体力の限界か、草ツパラに、倒れこけてしまう。

元々、引きこもり勝ちで体力に自信があるわけでもないのに、此れ

だけ、走り続けたのも初めての事だろう。

「母さん・・・・・・・・」

その眩きと共に、少年の意識は、闇に堕ちる・・・。

悲劇！！それを二度と味あわぬために！！（後書き）

これから、先様々な生活を送りそして、野望へと至ります、つまりコレは、主人公が魔王になりたかった本当の理由と言う奴です。この後の生活は、また語られる事があるでしょう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7057d/>

---

世界は俺を中心に回っている！！

2010年10月14日14時13分発行